

## 歴史と文化

# 日本民族と朝鮮民族は同胞

はらから

Japanese and Korean Races are Brothers

朴炳植\*

## 日本語のルーツ

現在、終戦後43年たちましたが、その43年という短い間に、敗戦国である日本は世界の優等生になった。アジアのチャンピオン日本がこのごろ国際社会化問題を大きく取り上げており、「日韓トンネル計画」もいわゆる国際化への大きなステップであると考えたときに、皆さんの仕事の意義は大きいと思います。

そこで一つ考えなくてはならないのは、世界の先進諸国の中で、他の国々と日本とでは一つだけ大きく違うところがある。それは何かというと、日本だけが素性がわからない。日本のルーツがわからない。言葉のルーツがどこにあるのかわからないわけです。これを日本の言葉で言い直すと、非常に申しわけないけれども「どこの馬の骨かわからない」となるわけです。しかし、そんなことがあるはずがない。本当はちゃんとした素性があり、日本語のルーツもわかっているわけです。

ところが、金澤庄三郎氏は今から百年も前に日本語と韓国語が同じものであると説破されました。その後一步も進まず、いまだに日本語のルーツの解明がされていない。

このように、もう百年も前からいわれているのに、一步も進まないばかりか、最近大野晋さんあたりは、タミールの方にいってしまって、まるで逆の方向にいっているような感じさえあるわけで



図1 大陸からの移動

\*語源研究家

す。

そこで、その壁は何であるのかを考えざるを得ませんが、日本語と韓国語を比較するためには、同じ時代の文献が必要なわけです。日本には万葉集、古事記、日本書記など、8世紀初頭にできた文献がいまだに残っております。ですが、韓国側には三国遺事や三国史記の、いわゆる12世紀から13世紀にかけての文献しか残っていない。だからその2国間の文献の間にはだいたい5百年の差がある。同じ時代の文献でなければ、言葉もかなり変化しているので、その「2国に残されている文献の比較によって言葉のルーツを探ることはできない」というのが、今までの言語学界の立場でありました。

しかしながら私がそれを解決する方法としてやったのは、日本と韓国が使っている中国漢字の音を5万～6万くらい比較して、その音の間にどういう法則があるのかを調べてみたところ、非常に規則的な変化法則があることがわかった。このように日韓の両語間の音の比較によって作ったものを、私は「音韻変化の法則」という論文で発表してもう3年近くなっています。ところが日本の学者の中には、日本の漢字音と、韓国の漢字音は、そ

- 一、竹内太古史：茨城県北茨城市にある皇祖皇太神宮  
天津教の管長、竹内家に伝わる古文書
- 二、九鬼神伝精史：紀伊熊野本宮司職、九鬼家所蔵
- 三、富士高天原朝史：富士皇太神宮司職、宮下家の  
宮下文書
- 四、上記（ウエツフミ）：源頼朝の子、大友能直によ  
つて編纂された古代史料
- 五、東日流外三郡誌（ツガルソトサングンシ）：  
青森県市浦村史資料編として、昭和五〇年に公開さ  
れた古文書

資料1 ここ100年ほどの間に発見された  
幾つかの古文書

れ自身が同じでないと頑張る学者が多少おるわけです。そういう学者は、えてして非常に立派な大学の学者である。それで、そのような学者の反論にあうと、私ごときものが発表したものは使い物にならないようになる。そこで私が既に発表した「音韻変化の法則」を裏付けるために何をやったかと申しますと、日本書記や古事記の中にある言葉の変化、すなわち同じ本の中にある言葉がどのように変化してきたのかを調べたわけです。その結果、先ほど申し上げたように漢字の音を比較したものと寸分たがわない、全く同じものであることがわかったわけです。

このようなお話は、実は皆さん非常に退屈であり、古代のロマンがあるお話の方が面白いんです。本当は、私の話は「音韻変化の法則」を少し皆さんに聞いていただいたうえで、古代史の方にいく



図2 現在の韓半島

のが順序であります。しかし、私が古代史に関するお話をしても、それは私一人の意見であって、あるいは独断であり偏見であると、ほかの人が今まで言ったのはその人たちのまた偏見であり独断である。だから比べようがない。あなたの立場ではそうかもしれないが、こちらの先生の話によるとそうではない。こういうように皆さんは“狐”につままれたような状態から脱出することができないわけです。

したがって、私は皆さんに退屈されるであろうことを十分知りながらも「音韻変化の法則」がどのような課程を踏んで作られたのか、あるいはその「法則」によってどういうことが解説されるのか、申し上げたいと思っているのは、実はこの「法則」に従うと、まるで古代史が数学や物理と同じように科学的に説明がつくからであります。今日は、古代史のお話をすると皆さん、「音韻変化の法則」のお話を申し上げますと皆さん自身が古事記や日本書紀、あるいは万葉集を正しく読めるようになると思います。もちろん、短い話で完全にそのようになるとは考えませんが、こ

の方法でやれば道が開けるということだけは知つていただけるのではないかと思います。

謎を解く鍵は「音韻変化の法則」

「音韻変化の法則」は、漢字の日本音と韓国音を比較したものです。その例をいくつか先ず上げてから、古事記、日本書記の中のどの言葉がそれと同じような「音韻変化の法則」を作り出すのかを説明していきたいと思います。

ご存知のように、漢字は百済の王仁博士が日本に紹介したものですが、それがいつなのかを知るために日本書記を読んでみると、

王仁博士が来た年に百濟の「アカ王（阿華王）」が亡くなつた。

と書いてあります。しかし三国遺事や三国史記をみると、この亡くなつた王様の名前は「アシン王（阿莘王）」であり、西暦405年にあたる。ですから、西暦405年に百済の王仁博士が漢字の本を持ってきて日本で教えたことになる。言い直すと、日本に伝わつた漢字音の最初の音は百済の方

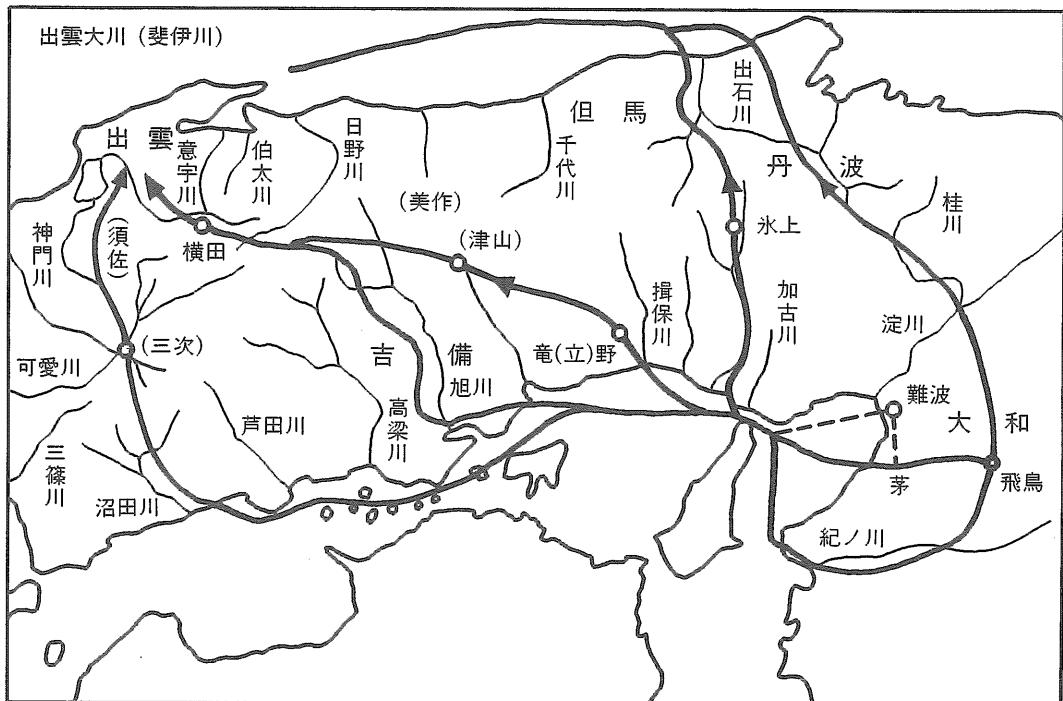


図3 大和と出雲を結ぶ道（門脇禎二『出雲の古代史』より引用）

言であったことがわかるわけです。

たとえば、韓国は「ハン国」なわけですが、日本にくると「カン国」になりますね。このときに、『ハ』行が『カ』行に変わる法則だといえるわけです。

日本書記の神代の八段には、

オオクニヌシノミコトが、出雲の日御崎ヒノミサキ（古事記では美保関）で食事をしようとする、海のかなたからスクナヒコノミコトという神様が船に乗ってきた。

その神様が上陸した浜の名前を、神代八段では「イササの浜」とありますが、同じ日本書記の九段では「イタサの浜」になっており、また古事記では「イナサの浜」となっている。今現在では「イナサの浜」と言っておりますが、こうしてみると、『サ』行と『タ』行、『ナ』行はお互いに交代性があることを示しているわけです。

もちろんこういう例一つをもって、それを普遍的にみんながそうであるとは言えません。そこでもう一つ調べていくと、今度は仲哀紀に、仲哀天皇が熊襲を討ちに九州へ参りますと、九州の「イト」の国のアガタヌシが仲哀天皇を歓迎する場面がでてきます。日本書記を書いた人はそこに注釈をした。

今の「イト」のアガタは、その昔は「イソ」のアガタであった。

と書いている。『タ』行と『サ』行が同じように変化することを裏付けるわけです。そればかりではありません。皆さんのお持ちになっている古語辞典を引いてみると、〈次〉は今は「ツギ」と言っていますが「スキ」であります。〈継ぐ〉も今は「ツグ」と言いますが昔は「ス」であります。『サ』行と『タ』行の交代は裏付けられるわけです。「ナ」と「タ」が変わるのはどういう例があるのか。内(ナイ)という字は、境内(ケイダイ)とも発音される。これによって、『サ』行『タ』行『ナ』行は同じものであることがわかるわけです。

もう一つは、神武天皇の東征のところに、

神武天皇の軍隊が船に乗って現在の大坂あたりに来ると「浪なみが速くて難儀をした」。それでそ

の場所を「ナミハヤ」と名付けた。

とある。ところが後になって「ナミハナ」となり、今は「ナニワ(浪速)」になった。こうしてみると「ミ」が「ニ」に変わった。すなわち『マ』行が『ナ』行に変わるし、それから『ヤ』行は『ナ』行に変わることがわかります。

そこでもう一つ確かめなければならないのは、こういうふうに変わることを「ヨコナバル」という。「ヨコナバレルモノナリ」と書いてある。「ヨクナバル」という言葉には「訛」という漢字が添えてあって、今日は「ナマル(訛る)」である。すると『バ』行と『マ』行は交代することがわかる。皆さんは今日も「目をつぶる」を「目をつむる」とも言うし、「けぶり」は「けむる」とも言う。『バ』行は『マ』行に変わることがわかります。

今度は濁音の問題ですが、日本の言語学者は、上代においてはこれは清音であったとか、濁音であったとかをよく言いますが、実はその濁音、清音である『バ』行と『ハ』行は全く同じものであるとわかる。例えば、日(ヒ)は清音ですが、2つ重なると日々(ヒビ)になります。これを日本の学者は2つ重なったからだと言いますが、そうではない。なぜかというと、場所(バショ)の〈場〉は「訓」で読み、〈所〉は「音」読みである。〈場〉は本当は「ジョウ」であるはずなんです。「バ」というのはいわゆる日本古来のヤマト言葉であり、〈場〉を「ハ」と言うわけです。「ハ」が上にきているのに濁音になっていることは、いつでも清音と濁音は交代するわけです。その他にも〈大学〉は「ダイガク」であるが、〈大変〉は「タイヘン」と清音になります。

これだけ例を挙げても、日本書記や古事記の中にどれだけ「音韻変化の法則」を裏付ける言葉が載っているかを知り得るわけです。

日韓の「父母」の呼称は同じである

日本語と韓国語が同じものでないという根拠には、例えば「お母さん、お父さん」を、韓国語では「オンマー、アボジ」と言うけれども、全く似

てないじゃないか。しかも家族の中でも特に、父母の呼称である「チチ、ハハ、トウサン、カアサン」は本当に百年たっても、2千年たっても変わらない言葉であるはずだから、それはとんでもない違ひだというわけです。

しかしながら、それは今まで「音韻変化」を知らない人が言うことであって、その法則がわかると全く同じものだとわかってくる。

「お母さん」の古代語形は「アマ」であります。それは日本全国の方言に今でも残っております。「ア」は“高い”“偉い”“美しい”という意味の言葉であり、「マ」は“女”的ことである。誰が何といっても、お母さんより“美しい偉い女”はいなのはずです。

日本語で、存在することを「アル(有る)」と言いますが、ところがそれが「オル(居る)」に変わり、そして後には「イル(居る)」になる。ということは、日本語においては母音は「ア～オ～イ」と変わっていくことが説明できます。

先ほど述べたように『マ』行は『バ』行に変化するし、また清音と濁音は同じだから「バ」は「ハ」になり、そして『ハ』行は『カ』行に変わるから、ここで初めて「オカさん=お母さん」の形ができるわけです。

もう一方、「マ」が「バ」に変わった「アバ」という呼び方は、秋田県をはじめ石川県、津軽、あ

るいは福岡、沖縄までも方言として今でも残っており、また「アバ」あるいは「アッパ」、「アンマ」という形でも残っている。

ところで、子供というのはお母さんに甘えよう、甘えようします。お母さんはこの世の中で一番甘えることのできる人なんです。そこで「ア」は尊敬の美称ですから、それを取って「ハ」になる。ところが日本語において特に単節音はリピートされる。幼児言葉で例えば、目は「メメ」、手は「テテ」、蝶は「チョウチョウ」になります。このように一つあっても2度繰り返して言うのが日本の言葉の趨勢であります。それで「ハ」は2つ重なって「ハハ」になり、変化して「カカ」になります。しかしそれでは失礼だと考える人は「おカカさま」あるいは「おハハさま」と言います。このようにして日本には「お母さん」という言葉ができたわけです。

韓国では、「アマ」が「オンマ」に変わっています。アイヌ語でも「オンマ」と言い、方言にもたくさんあります。皇室でも「オンモ」と言う。また、母屋（オモヤ）は何を意味するかというと、「オンマ」が「お母さん」と同じであることを立証しているわけです。

つぎに「お父さん」の古代語形は「アハ」である。「ア」は先ほど申し上げたように、“偉い”ということなんです。「ハ」は“太陽”を意味する。太陽が「赤い」のは力が少ない日の出や夕日の時であり、これが中天にある一番盛りの時は「白日」というから太陽は「白い」。韓国で白いことを「ハヤン」と言います。

なぜお父さんを太陽というのか、お父さんばかりでなく、我々は太陽信仰族で太陽を自分の祖先だと考えている。そこで自分のことを太陽というわけです。佐藤さんの子供は佐藤であり、鈴木さんの子供は鈴木である。エジプトやインドの神話でも、「ラ」は太陽神の名前であり、「ハ」は太陽神の属性であります。そこで太陽の子孫である我々は自分のことを「ラ」と言っているわけです。

ところが「ラ」は「ナ」に変わるわけです。日本の古語辞典などを調べると、「ナ」のところに

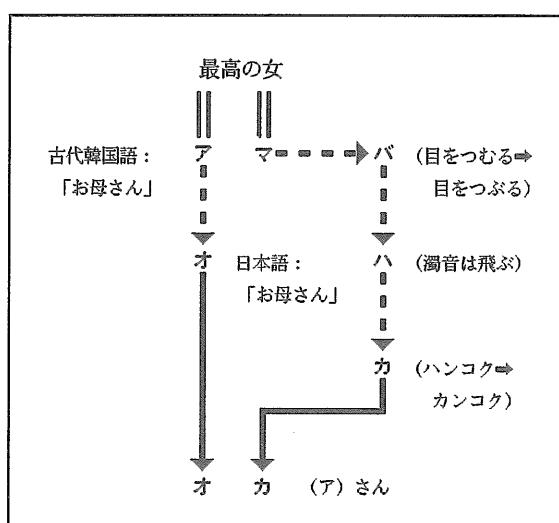


図4 音韻変化の法則例

「我」と書いてある。すなわち古代においては自分のことを「ナ」と言っていたわけです。ところが日本の辞典の面白いのは「ナ」のところに「お前」と書いてある。ここでちょっと考えなくちゃならないのは、この世の中で人間はもちろん動物、植物にとっても一番だいじなことは、「私」と「お前」という観念のはっきりした区別である。もし「私」と「お前」の区別がつかなければ喧嘩が起こるわけです。そこには明白な区別がなくちゃならない。にもかかわらず日本の辞典にはちゃんと、「ナ」のところに「私」と「お前」の両方が入っているわけです。これは世界のどこの国の言葉にもこういう現象はないわけです。なぜこうなったのか。これは「ナ」から「ノ」に変わったのが、日本語には韓国語の「ノ」という「o」音の表記手段がなかったので「ナ」になってしまった。日本の辞典では「ナ」が「私」と「お前」の両方になっているけれども、実は韓国語の「ナ」と「ノ」がこのようになっていることがわかるわけです。

その後「ラ」は「ナ」から「ア」に変わってきます。日本の方言や、古事記、日本書記には自分のことを「ア」と言い、「我」を「アレ」とか「ア」と言います。このような変化を『ラ』行は『ナ』行を経て『ア』行に変わるという。〈李〉は「リ」ですが中世には「ニ」であり今は「イ」と言うのです。

話をもどしますと、「お父さん」は家庭において一番偉い太陽である。太陽は人である。「やはり」は「やっぱり」になり、日本語の「ハ」の前には促音の〈T〉がよく起きます。そこで「アハ」が「アタ」になる。その後「ア」が「オ」に変わるので、ここで「オタさん=お父さん」の形ができるわけです。

沖縄の方言には「アハ」から「アサ」になっているのがあります。先ほど申し上げたように『タ』行と『サ』行の交代ばかりでなく、『ハ』行と『サ』行の交代も意味しているわけです。関西弁の「居なはる」が関東にいくと「居なさる」となり、『ハ』行が『サ』行に変わることを裏付けるものです。そこで「アサ」という沖縄の方言が残っているわ

けです。韓国では「アハ」に濁音が付いて「アバヂ」になり、「チ」は人という意味です。

「お父さん」を「チチ」と言います。「お母さん」のときと同じで、子供は甘えようとするから「ア」が抜ける。すると単節音の「ト」はリピートして「トト」になり、次に「テテ」になり、それが「チチ」に変化したわけです。このように母音が変わってくる現象は、「アル(有る)」「オル(居る)」「イル(居る)」のほかにも、「うごく」を「いごく」と言います。「よい」は「ええ」になり「いい」になります。このように「アイウエオ」母音はみなお互いに交代するので、「トト→テテ→チチ」になっています。したがって、日本語と韓国語は父母の呼称が全く同じであることが「音韻変化の法則」によってわかるわけです。

そのほかに日本と韓国では体の部位の名称が違う。体の名称は2千年3千年たっても変わらないのに、両国では全く違う。だから同じ言葉ではないと今までいわれてきたわけです。

例えば韓国語では「目」のことを「ヌン」と言う。日本の古代語形は「目の当たりに見る」で「マ」と言い母音が変化して現在の「メ」になっている。「ヌン」は『ナ』行である。ところが海辺(ウミベ)が海原(ウナバラ)になることから、『ナ』行と『マ』行がお互いに交代することがよくわかります。このような例はたくさんあります。古代の史讀の研究によれば、「ナ」と「マ」は「水」あるいは「湖」と書いてある。顔のなかで目はあたかも湖のようである。だから詩人たちは恋人の目を湖のようだと表現しているわけなんです。我々の祖先は体の部位の名称をつけるときに、それがどこにありどのような役割りをするのかを考えて名前をつけた。例えば「頬」は「辺→ハ」であり、それが「ハ→ホ」となったあと、「ホ」がリピートされてそうなるのである。韓国では「ボル←ハリ←辺のもの」で同じである。終子音は日本語にないからそれを取ると「ホ」になる。なぜ「ホ」と言うか、顔の「端、辺(はし)」にあるから「ハ」になり「ホ」になった。「ヘソ」は韓国で「ペコブ」と言う。このように『サ』行から『カ』

行に変化する例に「のせる」を「のっける」とも言うし、〈車〉の音は「シャ」であると同時に「キヨ」でもあり「コ」もある。したがって『サ』行が『カ』行に変化することがわかる。ちなみに、腹が減ったことを韓国では「ペコップ」と言い、日本ではそれをリピートして「ペコペコ」と言う。

また、何か始めるときに「セーノ」と言うが、韓国語の「1=ハナ、2=トゥル、3=セー、4=ノッ」の3と4のことで「イチニイノーサンシ」と同じ意味である。そればかりでなく「ジャンケンポン」は韓国語では、「ジャ=それでは」、「ケ」は『ハ』行と『カ』行の変化で「ヘ」になり、「ボーハ」で「ジャヘバ=ではやってみよう」になる。このように一般的に今でも使われている言葉だとわかると、何も古代史にまで遡らなくても日本語と韓国語が全く同じものであることがよくわかるわけです。

日韓両民族には、99%同じ血が流れている

どうして日本語と韓国語が同じものなのかを考えますと、日本の原住民は、昔まだ大陸と陸続きになっていたときに、シベリアのバイカル湖方面から樺太を通って南下してきた人たちと、韓半島を通ってきた人たちがいたわけです。そして今から約1万年～1万2千年くらい前に陥没によって日本列島になると、彼らはいわゆる大きな島流しにあった形になってしまったわけです。当時、彼らは大陸と同じ言葉を使っていた。それがわかるのは、アイヌ語が「お母さん」を「オンマ」と言うばかりでなく、「ワッカナイ（稚内）」の「ナイ」はアイヌ語で「川」のこと、川のなかでも狭い川であり、韓国では「ネ」と言う。「ノボリベツ（登別）」の「ベツ」も川で、広い川であり、韓国では「ボル」と言う。アイヌ人たちの地名から、韓国語とともに同じであったとわかる。ただ、アイヌ人たちの顔形がちょっと違うのは、北方を通る間にシベリアの人たちと混血が起こっているからである。

自然科学的にいって、島に押し込まれると体の

大きいものも小さくなる。食物が少ないため、明石湾で見つかった象の骨も小さかった。また最近、象の骨が発見されたがそれは大きかったので、もともと大陸から来た象は大きかったが、永い間島に閉じ込められて小さくなつたことがわかる。日本の古代人は大陸の人たちより非常に小さかったから倭人（小さい人）といわれた。戦後の子供たちはずいぶん体が大きい。それは島が島でなくなり、食料事情も良くなり、国際的になってきたからである。

また、日本の考古学者がいう「弥生時代」（2千3百年前後）は、私の考えでは3千年に近いと考えますが、陥没した後の7千～8千年後に「弥生時代」の人たちが大陸から渡ってきた。では、その渡ってきた人たちと、島に閉じ込められた人々は言葉が通じなかったか。ちゃんと通じていた。なぜかというと、昔のように単調な生活をして社会の変化があまりないときは、言葉の語意も非常に少なくなつかわらないからである。ところがこのごろのように地球の隅々から情報が入って

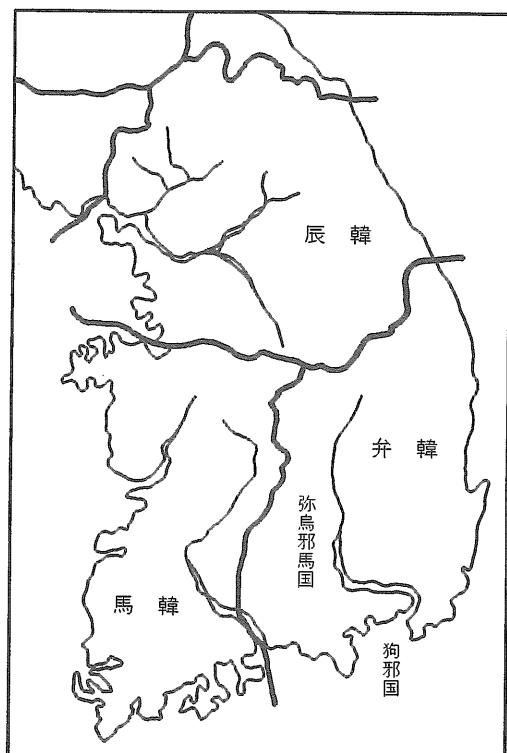


図5 弥生時代の韓半島

## 資料2 五十音には隠された音がある

A ア	I イ	U ウ	E エ	O オ	KA カ	KI キ	KU ク	KE ケ	KO コ
SA サ	SI シ	SU ス (SEU)	SE セ	SO ソ	TA タ	TI チ	TSU ツ (TSEU)	TE テ	TO ト
NA ナ	NI ニ	NU ヌ	NE ネ	NO ノ	HA ハ	HI ヒ	HU フ	HE ヘ	HO ホ
MA マ	MI ミ	MU ム	ME メ	MO モ	YA ヤ	I イ	YU ユ	E エ	YO ヨ
RA ラ	RI リ	RU ル	RE レ	RO ロ	WA ワ	I イ	U ウ	E エ	ヲ オ
NG (N)									

くる時代になると、言葉の変化が大きく起こる。

このような古代語が、奈良時代の中期から平安時代の初期にかけて大きく変化した。それまでは同じだったということが、日本書記によれば、

天智天皇が百済から亡命してきた人たちに朝廷（今の中官）の位を与える、次官級から局長、課長級を60数人一挙に採用した。

とあるように、もし言葉が同じでなかったら、この人たちに一人一人通訳を付けなくちゃならないわけだし、また日本書記や古事記にも韓国に通訳を連れていった記録はない。正倉院にある古文書を見ると、遣唐使には通訳がついていたと記録にあるが、遣新羅使には全然ない。これは同じ言葉を使っていたことを裏付けるものである。

## 古代語から日本語へ

どうして言葉が変化したか。それは、日本の言葉が平安朝のはじめにできたからである。最初にできたのは「天地詞」で48文字からなる。それから「大為爾歌」や「いろは歌」と、現在皆さんにお使いになっている「五十音図」ができた。五十音図の内容を見ると重複したものがあって、本当の数は44文字くらいしかない。しかも今、日本の学者に母音がいくつあるかと聞くと、当然のことのように日本の母音は5つあると言う。本当は6

つである。

「ウ」の発音をするためには、唇を丸くして前方に突き出し、そして上下の歯は離れて舌は宙に浮いて若干後方に後退する形をつくる「ウ」であります。ところが、『サ』行と『タ』行のウ列音「ス」と「ツ」を発音してみると、唇が横一文字になり、上下の歯は付いて舌の先端は下の歯ぐきを軽く撫でるような形になる。では、「ス」を発音した形のままで「ウ」を発音できるか、またその逆はできるかやってごらんになればわかる。その場合「ス」と「ツ」の「EU」音は前の方に突き出しながら発音するから言語学上「前方母音」といい、「ウ=U」

## 資料3 ハングルの基礎母音

ㅣ I	ㅑ Wə,	ㅕ YO,	ㅗ O,	ㅓ ə,	ㅏ A,
ㅠ YU,	ㅜ U,	ㅓ WE,	ㅡ E,	ㅔ æ,	ㅐ æ,
ㅡ EU,	ㅣ WI,	ㅏ WA,	ㅓ YE,	ㅑ YA,	ㅑ YA,
ㅓ EUI,	ㅓ WE,	ㅏ Wa,	ㅓ YE,	ㅓ Yae,	ㅓ Yae,

音は喉の方で発音するから「後方母音」という。これは言語学上の“いろは”であり“ABC”である。私が日本の多くの学者にそれを話したところ、ほとんどの人は膝をはたと打って「なぜこんな簡単なことを今まで知らなかったのか」と、皆さんびっくりしている。にもかかわらず、特に偉い学者になるほど「ス」音と「ウ」音は同じであると頑張る。

ところが奈良朝までは学者の皆さんも8つ母音があったことを認めている。「ア、イ、ウ、エ、オ」の5つのほかに「ə」「æ」「EU」の3つがあったであろう。

それはどういうところに現われるかというと、野球でいう「ストライク (strike)」という英語には「EU」音が3つでてくる。ところがこれを日本式に表記した瞬間に「seu tseu ra i ku」と発音する。「ku」も本来は「keu」の同母音である。言葉は何千年たってもなかなか変わらない。しかし、日本語だけは例外である。「strike」という英語が日本の音表文字で直して書いた瞬間に、英語は英語でなくなる。また、韓国語もそうである。そこで言葉は瞬間に変わってしまう。

奈良時代、平安時代以降、日本語が現在のように韓国語と相通じないようになった裏には母音の減少があるわけです。母音はあの当時でさえ8つから5つになり37.5%も減ったことになる。ところが、昭和の半ばになって文部省がたいへんなことをやった。『ヤ』行と『ワ』行の音のうちの5つ「YI.YE.WI.WE.WO」をまた捨ててしまった。例えば「ヲ=WO」の表記はもうしなくなった。それがどのように重要な発音であるかを、皆さんの中で年配の方は、いまだに覚えておられるでしょうけれども、「オジ（伯父）」は父母の兄をいい、「ヲジ（叔父）」は父母の弟のことをいう。私が子供のころも、ちゃんとこのような区別を先生から教えられていた。今はそんなことを教えていない。なぜだかわからない。これは言い過ぎた話かもしれませんのが、このごろの子供たちが長幼の区別、年上の人をあまり敬わない、敬意を表しないといいますが、学校に行っても小さいものも大き

いものも同じように区別なく教わる。こうなると、学校教育にもたいへんな影響を及ぼすわけです。

### 言葉の違いが国民性を変える

また言葉は、人の顔ばかりでなく性格まで変える。最近、中国残留孤児の問題が話題になっているが、テレビで見る彼らの顔はほとんどが日本人の顔じゃない。百%日本人の血を受け継いだ彼らが、幼いときから中国語を話すと、筋肉の使い方が違うので顔形やしわの寄り方も違ってくるわけです。

そればかりではなく、今度は性質までも違ってくる。強い発音をいつもしている人は、性格が荒く粗暴になる。フランス語とドイツ語は同じ語源をもっていることはもう説明がついている。しかし同じ言葉であるはずなのに、フランス人は柔らかく発音してフンワカな話をすることで柔らかい性格の持ち主になり、ドイツ人はキツイ発音で話をするのきつい性格に変わってきた。そうした、同じ語源であるにもかかわらず、また同じ地域、同じ気候のもとに住んでいながらも、フランス人とドイツ人はあれだけの差が生じるのである。

日本国内でも関西の人は非常に悠長な話し方で煮え切らないといわれるし、また関東の人は話し方もテキパキと性格もさっぱりしているといわれ、性格的な違いが明らかに存在する。そしてこの差は、朝鮮半島の西側と東側に住む人々との違いに似ている。

朝鮮半島では3世紀に入って、「高句麗」「百濟」「新羅」の三つの国家が勢力を伸ばしていた。すでにこの時、大和朝廷の祖地である「弥烏邪馬国（ミオヤマコク）」は、南進してきた「百濟」に服属させられていた。しかし、その「百濟」もAD663年、「唐」「新羅」の連合軍によって滅ぼされる。そして、滅亡寸前の「百濟」から日本の海軍船によって難を逃れた王侯貴族や、多くの学者たちが、日本の朝廷の中心になっていくのである。

こうして、関西には「百済」からの人たちが大挙して入ってきた。その当時の「百済」の文化は高かったので、人々は当然それを見習おうとし、言葉も真似ようとする。関西の人たちはこうして、「百済」特有のフンワリとした言葉に馴染んでしまったのだ。

こうして関西弁が生まれ、それが性格にも影響を及ぼした。したがって、関西の人たちは今の朝鮮半島の西側の人たちの性格に似ていて、どちらかと言えば温和で、煮え切らない側面がある。

一方、関東の人は東側の人たちに似ていて、話し方もテキパキと、性格もどちらかと言えばきつく、さっぱりしている傾向がある。

このように言葉の変化は、顔の形も変え、性格にも大きな影響を及ぼした。したがって、韓国人と日本人の国民性に、違いが現れはじめたのは、朝鮮半島に「ハングル」が生まれた15世紀、江戸時代の初期前後というのが、私の考えである。

このように言葉の音というのがものすごく大切である。なのに文部省は、皆さんの税金で義務教育をする形をとりながら、どんどん子供たちの言葉、しかも音を奪い去っていく。それを何とか

して防ぐ方法を講じない限り、これが未来永劫にわたって続いている。これを私は「日本語の悲劇」としています。

日本人は外国語が下手だといわれるのは、これだけの母音を奪われたからであり、他の国の母音の数は21~23くらいある。それを日本では5つの母音と、『サ』行『タ』行に隠されている「EU」の6つで発音しようとするから下手なのである。しかし、ちょっとしたアイディアを使えばそれは直る。今英語をはじめ外国語教育をするのに気の遠くなるような予算を使っている。それをなくす本当に簡単な方法がある。昔の五十音図には「バ」や「パ」のような「」表記はなかった。ところが、現在のように必要に応じて「」表記を使うのであれば、例えば「オ」を「オ」にしたら「WO」で発音し、また「ア」を「ア」にしたら「æ」の音で発音するのだと、小学校のときからそれを教えれば、日本人は簡単に外国語をしゃべれるようになることはまちがいない。いつもそう言っておりますが、まあ、そのようになるかどうかは文部省の方々次第であります。

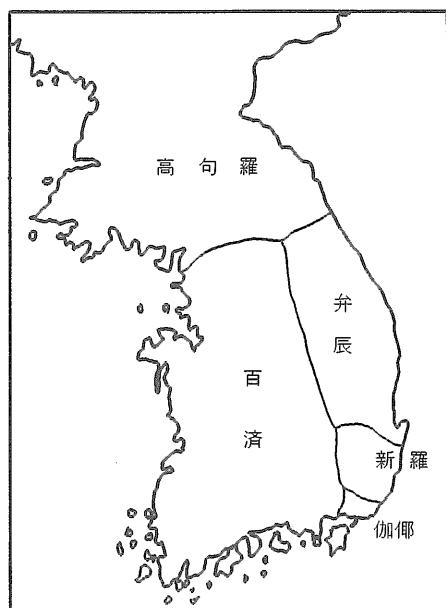


図6 四世紀半ばごろの半島状勢は  
このようであったと思われる

